

聖光『徹選擇本願念佛集』 訳注（二）

上 野 忠 昭

（抄録）浄土宗鎮西流二祖聖光撰『徹選擇本願念佛集』上・後半、すなわち『選擇本願念佛集』第九章（第十六章の解説部分の、現代語訳および注である。この部分は特に、『選擇集』第十六章に説かれる八種選擇に聖光が加えた二十二種の選擇について、また『選擇本願念佛集』に加えて『徹選擇本願念佛集』を撰述した理由について述べられており、鎮西教學理解には必須と思われるところである。

（キーワード）・聖光 ・弁長 ・徹選擇本願念佛集 ・選擇本願念佛集 ・二十二選擇

一 はじめに

前号（『法然仏教学研究センター紀要』第10号）に続いて、浄土宗鎮西派二祖聖光（一一六二―一二三八）撰述の『徹選擇本願念佛集』巻上の後半部分に、現代語訳および注を付する。後半部分は、『選擇集』の第九章から第十六章までの註釈である。特に、法然が第十六章に説く八種選擇に、さらに広く経論類から選擇の内容を抽出して二十

二種を加え、「選擇」という内容が諸経論や諸師の説に裏付けられた正しいものであることを強調する。また、最後尾に、『選擇集』に加えて、この『徹選擇集』を撰述した意図を二点挙げて巻上を締めくくっている。引用の出典などについて、前半では扱わなかった江戸時代の学僧妙瑞^①補『徹選擇集私志記』^②を参考にした。ただし、膨大な量なので、その参考内容の一一について明記はしていない。

【凡 例】

- （1）底本は『浄土宗全書』巻七所収の天保版を用いた。ただし、巻頭の天保六年三月に立道の識した「徹選擇集試言」は省略する。訓読は原本に付されている訓点にはほぼ従ったが、訳者による変更点もある。『浄土宗全書』にある振り仮名はルビで示し、訳者が補った読みは（ ）で示した。
- （2）上下二段とし、上段は訓読、上段に対応する箇所現代語訳を下段に配した。本来は原文を提示すべきであるが、紙数の都合で

提示していない。

(3) 注は末尾に付した。

(4) 訓読においては、漢字は旧字体、現代語訳と注においては、常用漢字を基本としたが、注の引用文については原文の字体を尊重した。

(5) 注の引用文はできる限り訓読し、原文がカタカナの箇所はカタカナで表記し、送り仮名はひらがなで附した。

(6) 漢文の中、「而」などの不読の文字は（ ）でくくって示し、かなで表した方が読みやすいと思われる場合は、例えば「ず(不)」「か(乎)」のように表した。再読文字は「當に」べし(當・再読)のように表記した。ただし、注の引用文の訓読では、これらは省略して表記していない。

(7) 訓読および現代語訳中の文献名は『』で囲んだ。

(8) 引用や説明される語句には「」を付け、引用中の括弧は、《》とした。

(9) 割注の小文字はへで囲った。

(10) 訳文中、訳者が補った部分は「」でくくった。

(11) どの術語の訳かが明らかにした方がよいと思われる場合は、() 内にもとの術語を示した。

(12) 「問曰」「答曰」等の問答の冒頭には、訳文において【問】【答】のような記号を挿入した。

(13) 叢書については左のような略号を使用した。

『大正蔵』	『大正新脩大蔵経』	大蔵出版
『浄全』	『浄土宗全書』	山喜房仏書林
『続浄』	『続浄土宗全書』	山喜房仏書林

(1) 妙瑞…天明七年(一七八七)二月二五日。増上寺学頭、鴻巣勝願

寺三四世、飯沼弘経寺五三世を歴任。『徹選択集私志記』『鎮西名目問答奮迅鈔』を著し聖光教学の顕彰に努め、伝法にも造詣が深く『浄宗

伝灯提耳籤』二巻を編纂した。『新纂浄土宗大辞典』参照。

(2) 妙瑞訂補『徹選択集私志記』三巻…『浄全』八・一一四頁～二四六頁。

二 訳注

【訓読】

第九篇に、「念佛の行者四修の法を行用すべ(可)し」とは(者)、師の云く、念佛の行者往生の願を發して、或は三萬返を修し、或は五萬

【訳】

第九篇に「念仏の行者は、四修の法を用いるべきである」とあることについて、師法然上人は、「念仏の行者が往生の願を起こし、三万返

六萬等を修し、臨終に（于）至るまで退轉無からし（令）むるは（者）、此れ則ち四修の（之）念佛なり（也）。此の意を以て能く能く可思ひ合すべ（可）し（也）。

第十篇に、「彌陀の化佛、來迎して聞經の（之）善を讃嘆したまはず（不）、唯だ念佛の行を讃嘆したまふ」とは（者）、所謂る念佛行者、機熟し時至て其の行成就する（之）時、彌陀の化佛、來たりて（而）念佛を讃嘆したまふ。此れ則ち我が本願の故なり（也）。十二部經を讃ぜざ（不）ることは（者）、此れ則ち其の本願に非ざるが故なり（也）。

第十一篇に、「雜善に約對して念佛を讃嘆したまふ」とは（者）、我れ等、無始從り生死に輪廻し、今度念佛に遇ひて往生を得べ（可）し。此れは是れ上上人なり（也）。最勝人なり（也）。好人なり（也）。妙好人（也）。又、觀音勢至の（之）二尊、朋友知識と爲て（而）影護を垂れ増上の勝縁と爲て行者を離れず（不）。此の現益を思ふに、念佛の行者、尤も殊勝なり（也）。

第十二篇に、「釋尊定散の行を付屬したまはず（不）唯だ念佛を以て

を修し、あるいは五万・六万返等を修し、臨終に至るまでやめることのないようにするのが、四修の念仏である」と仰った。この趣旨をよくよく念頭におくべきである。

第十篇に「阿弥陀仏の化仏が、〔臨終の上品上生の人を迎えに来て〕經の題名を聞いた（聞經）善行を讃嘆せず、ただ念仏の行のみを讃嘆される」とあることについて、つまり念仏の行者が、その資質が十分に整い、時が至つて、念仏行が成就する時、阿弥陀仏の化仏が來迎して、念仏を讃嘆される。これは〔念仏の行が〕阿弥陀仏ご自身の本願であるからである。十二部經の聞經を讃嘆されないのは、聞經が阿弥陀仏の本願でないからである。

第十一篇に「念仏以外の雑多な善行と対比して、〔釈尊が〕念仏を讃歎される」とあることについて、私たちは、はるか昔より生死の苦しみの世界を輪廻してきた。この度の生において、念仏の教えに出会い、極樂に往生することができる。これは〔人の中の〕上上の人である。最も勝れた人である。希有なる人である。好ましい人である。すばらしく好ましい人である。また、觀音菩薩と勢至菩薩の二人の尊い菩薩が、親しい友人や知人であるかのように常に、影のように付き従い守つてくださつて、往生のための勝れた縁となつて行者を見離すことはない。この現世における利益を思うと、念仏の行は最も勝れた行である。

第十二篇に「釈尊が弟子阿難に、定善・散善という諸行を授けず、

阿難に付屬したまふ」とは（者）、師の云く、此れは是れ、至極最要の（之）文なり（也）。念佛行者、尤も肝に染むべ（可）きのみ（耳）。觀經の意「汝好持是語」等とは（者）、阿難は是れ釋尊弟子の中に於て憶持不忘の（之）徳有り。佛の言く、汝は是れ憶持不忘の（之）人なり（也）。好く此の觀經を聞持して我が滅度の後に（於）弘通すべ（可）しと（也）。然るに此の觀經は佛の隨自意に約せば（者）、但だ是れ南無阿彌陀佛なり（也）。是の故に佛名を以て阿難に付屬したまふ（也）。之れに依て善導の云く、佛の本願に望むれば意ろ、衆生をして一向に専ら彌陀佛の名を稱せしむるに在りと（已上）。知んぬ。智人は智人を知る。是の故に、釋迦の（之）智人有て、彌陀の（之）智人は其の名號を以て往生の（之）本願と爲すと知りたまふが故に。而も阿難に對して此の經を流通したまふの（之）時、彌陀の（之）名號を付屬したまふ（也）。

近代の有人の云く、夫れ菩提心は（者）大乘の（之）慈父、菩薩の（之）悲母なり（也）。佛海の（之）源底、法門の（之）奥藏なり（也）。菩提心を發さず（不）んば（者）菩薩の（之）功德成就すべ（可）からず（不）。菩提心を發さず（不）んば（者）如來の正覺、満足すべ（可）からず（不）。然るに、今『選擇集』の意は、但だ念佛の（之）一行を以て其の往生の（之）淨業と爲して、菩提の（之）祕術を具足せし（令）めず（不）。既に大乘の（之）教理に違し、又、

ただ念仏のみを授けられた」とあることについて、師法然上人は、「これはまさしくこの上もなく重要な文である。念仏の行者は、もつとも肝に銘じておかねばならない」とおっしゃった。^②『觀無量壽經』の趣旨を述べると、「汝好持是語」等について、阿難は釈尊の弟子の中で、記憶を保つて忘れないというすぐれた徳性を持っている。釈尊は「〔阿難よ。〕そなたは記憶を保つてを忘れない人である。この『觀無量壽經』の教えをよく聞き、よく憶えて私が入滅したのちに、世に広めよ」とおっしゃった。^③ところが、この『觀無量壽經』は、釈尊が自らの意志によつて解かれたという趣旨からみれば、ただ南無阿彌陀仏と唱えることを勧めている。したがって、仏名のみを阿難に付屬されたのである。經の趣旨を汲んで、善導大師は「阿彌陀仏の本願を念頭に置くならば、この經をお説きになった釈尊の意図は、人々にひたすら阿彌陀仏の名を称えさせることにある」と云われた。^④智者は智者を知る。したがって智者である釈尊は、智者である阿彌陀仏が自身の名号を本願とされたことを知ったので、阿難に『觀無量壽經』を弘めるために伝えたとき、阿彌陀仏の名号を託されたことがわかる。近ごろのある人が次のように云っている。そもそも菩提心は、大乘仏教徒にとつて慈愛に満ちた父親のようであり、菩薩にとつて慈悲深い母親のようである。海のような仏教の教えの深い底であり、教えの中では奥深い蔵で大切にされているものである。菩提心を起こさなければ、菩薩の修行で得る功德を成就できない。菩提心を起こさなければ、修行を満足して悟りを開き如來となることはできない。それなのに、『選擇集』に説く内容は、ただ念仏の一行のみが淨土に往生のための

菩薩の（之）巧度に背けり。若し爾らば、大乘の（之）教なりと雖も、菩薩の（之）行を去る。何ぞ往生極樂を遂んや（耶）と（云云）。

此の難、尤も愚かなり（也）。所以へは（者）何んとなれば、菩提心には（者）二有り。一には（者）凡位の菩提心、二には（者）聖位の菩提心なり。

凡位の菩提心に就て亦二有り。一には（者）薄地の凡夫の菩提心、二には（者）六度の菩薩の菩提心なり。薄地の凡夫の菩提心とは（者）、一華一香一稱一禮の（之）功德を以て佛道を成ぜんと願するなり（也）。六度の菩薩の菩提心とは（者）萬行諸波羅蜜一切の（之）善根を修して佛道を成ぜんと願するなり（也）。

又、菩提心に二有り。一には（者）菩提心願、二には（者）菩提心行なり。菩提心願とは（者）所謂る四弘誓願是れなり（也）。菩提心行とは（者）所謂る六度萬行是れなり（也）。今、此の宗の意は（者）薄地の（之）凡夫、底下の（之）我れ等は、斷惑修理の（之）觀行に能ず（不）、入聖得果に堪えざ（不）るの（之）根機なり。是の故に、念佛の（之）一行を修して、先づ近く淨土に生ぜんと願じ、次に遠く佛果に歸せんと願ず。此れは是れ菩提心願なり（也）。又、四弘誓願の（之）中に、「法門無盡誓願知」とは（者）、法門萬差なれば無智下

行業であるとして、菩提「心」は計り知れない功德を秘める手だてでありながらそれを具えることを説かない。このことは、もはや大乘の教えに随わず、また、菩薩の巧みな救いに背いている。もしそうであれば、大乘仏教の教えであるといっても、菩薩の行から離れた行である。どうして「大乘の教えである」極樂往生を遂げることができようか、云々。

この非難は最も愚かなものである。その理由は、菩提心には二つある。一つめは「十地に入る前の」凡夫の位の菩提心、二つめは「十地以上の」聖人の位の菩提心である。

凡夫の位の菩提心には、また二つある。一つめは、薄地の凡夫の菩提心、二つめは六度の菩薩の菩提心である。薄地の凡夫の菩提心とは、一本の花、一つまみの香、一辺の称名、一度の礼拝の功德によつて仏道の修行を成就しようと願う心である。六度の菩提心とは、すべての善行・さまざまな菩薩の修行、一切の善の因となる行為を修して仏道の修行を成就しようと願う心である。

また、菩提心にも二種ある。一つめは菩提心願、二つめは菩提心行である。⁶菩提心願とは、いわゆる四弘誓願⁷である。菩提心行とは、いわゆる六波羅密を成就するためのあらゆる修行（六度萬行）である。今、この淨土宗の趣旨の述べると、「能力の劣る」薄地の凡夫、これ以下はない底下の私たちは、煩惱を斷じ真理を求める觀の修行をすることが不可能な、聖人の位に入つて悟りを得ることのできない資質の者である。したがって、まずは念仏の一行を修して、到達可能な淨土への往生を願い、つぎに更にその先にある仏の悟りの位に至りたいと願う。

根の（之）輩は之れを知ること能はず（不）。是の故に、念佛の（之）一門を行じて浄土に往生しての（之）後、無盡の法門を修習して（而）佛道を成ぜんと願するも亦是れ菩提心願なり（也）。又、善導の意は、南無とは（者）作願廻向なり（也）。此の廻向に約せば（者）亦近遠有り。近廻向とは（者）往生極樂なり（也）。遠廻向とは（者）阿耨菩提なり（也）。此れは是れ菩提心願なり（也）。又、不惜身命の（之）行は凡夫の堪ゆる所に非ず。易行易往の（之）法、尤も我れ等が分に當れり。須く念佛往生の（之）後、三解脱を證し、六神通を得て此の穢國に還來して苦の衆生を救攝すべ（須…再読）しと要するも、亦是れ菩提心願なり（也）。然れば則ち、今時具縛の凡夫は煩惱の境は強く、忍力の根は弱し。設ひ菩提心願を發すと雖も、更に菩提心行に能ず（不）。故に之れを廢するなり（也）。全く以て難に非るか（歟）。

之れに依りて『大智度論』に云く、「新發意の菩薩は譬ば鳥子の雙翼未だ成ぜざ（未…再読）れば逼て高く翔かし（令）むべ（可）からず（不）、羽翮成就して則ち能く遠く飛ぶが如し」と。

又、『論』に云く、「譬ば鳥の翅無くして高く翔ること能はざ（不）る

これは菩提心願である。また、四弘誓願の中の「法門無尽誓願知」とあるのは、仏の教えは多岐にわたり、智慧が無く資質の低い者は、それを知ることはできない。そこで、念仏という一つの教えを行じて浄土に往生したのちに、限りなく多岐にわたる仏のすべての教えについて、繰り返し修行して悟りに至ろうと願うことであり、これもまた菩提心願である。また、善導の教えは、「南無とは、願を起こして、修行における善根功德を目的に振り向けること（廻向）である」と⁸とする。この廻向という立場に立つと、近と遠の二つがある。近廻向とは、極樂に往生しようと廻向することである。遠廻向とは、この上もない悟りを得ることに廻向することである。また、身命を惜しまない修行は、凡夫には不可能である。行じ易く行き易い教えこそ、もつとも私たちには分相応である。必ず、念仏によつて極樂に往生した後、空・無相・無願の三解脱三昧を証し、六神通を得て、この娑婆世界に帰って苦しんでいる者たちを救い取らなければいけないと求めるのも菩提心願である。そうだとすると、今の煩惱に縛られている凡夫は、対治すべき煩惱は強く、耐え忍ぶ力は弱い。たとえ菩提心願を起こしたとしても、菩提心行に耐えることができない。ゆえに菩提心を捨てるのである。¹² まったく、非難は当たらない。

このことによつて、『大智度論』に、「初めて菩提心を起こした菩薩は、鳥の子どもが両方の翼がまだできていなければ、追いたてて高く飛ばせてはいけない。翼が完全¹³にできて遠く飛ぶことができるようなものである」と云う。¹⁴

また、『大智度論』に、「例えば、鳥に翼が無くて高く飛ぶことができ

が如く、菩薩、神通無くんば意に隨て衆生を教化すること能はず
(不)と(已上)。

天台大師の云く、「又、鳥子の翹羽、未だ成ぜざ(未…再読)れば、
祇だ樹に依り枝に傳ふことを得て遠く去ること能はず(不)。翹羽成
就して方に能く空に飛ぶこと自在無礙なるが如く、凡夫は力無ければ、
唯だ須く専ら阿彌陀佛を念ずべ(須…再読)し」と(已上)。

大智律師の云く、又、弱羽の祇だ枝を傳ふべ(可)きが如く、是れよ
(自)り盡く平生の所學を棄て専ら淨土の教門を尋ぬと(已上)。

天竺の菩薩、并びに唐土の人師も同じく此の旨を存す。尤も信順すべ
(可)し。敢て疑謗する勿れ。

第十三篇に、「念佛を以て多善根と爲し雜善を以て少善根と爲す」と
は(者)、所謂る往生の功德善根を以て福と名づくるなり(也)。此の
福に(於)二種有り。一には(者)多善根福德因縁。二には(者)小
善根福德因縁なり。多善根福德因縁とは(者)念佛なり(也)。小善
根福德因縁とは(者)雜行なり(也)。唐土中古の學者王日休先生、
此の義を存す。之に依りて自ら稱名の行を修し立ち乍ら往生を遂げ畢
ぬ。又、元照律師も同じく此の義を存す。(云云)。

第十四篇に、「六方恒沙の諸佛、餘行は證誠したまはず(不)唯だ念
佛を證誠したまふ」とは(者)、問ふ、『大乘莊嚴功德經』の如きは諸

ないように、菩薩に神通力が無ければ、思い通りに衆生を教化するこ
とができない」(以上)と云う。⁽¹⁶⁾

天台大師智顗は、「また、鳥の子どもがまだ翼ができていなければ、
ただ木にとまり枝をつたうことができるのみで、遠く飛び去ることは
できない。成長して翼が出来上がってから、空を飛ぶことが自由自在
になるように、凡夫は「修行する」力が無ければ、ただ必ず阿彌陀仏
を念じるべきである」(以上)と云う。⁽¹⁷⁾

大智律師元照は、「また、弱い羽根の鳥は枝を伝わらなければいけな
いように、これより今までに学んだすべてのことを捨てて、淨土の教
門を尋ねた」(以上)と云う。⁽¹⁹⁾

インドの菩薩も中国の高僧も同じ意見を持っている。当然、信じ順う
べきである。決して疑ったり非難したりしてはいけない。

第十三篇に、「念仏を多善根とし、そのほかの雑多な善を少善根とす
る」とあることについて。いわゆる往生を得るための功德・善根を
「福」と名づける。「福」には二種ある。一つめは多善根福德因縁、
二つめは少善根福德因縁である。多善根福德因縁とは、念仏である。
少善根福德因縁とは、念仏以外の雑多な行である。中国宋代の學者で
ある王日休先生は、往生の因縁となる多善根は念仏であると考えてい
た。これによつて自身も称名念仏を行じて往生を遂げた⁽²⁰⁾。また、靈芝
元照律師も同様にこの考えを持っていた、云々。⁽²¹⁾

第十四篇に、「六方のガンジス河の砂の数ほど無数の諸仏が、諸行を
真実であると証言せず、ただ念仏のみが真実であると証言される」と

佛の證誠を明すに、念佛・餘善俱に之を證誠す、如何。答ふ、其の二義有り。一には(者)、念佛・餘行俱に之を證誠したまふか(歟)。但し『選擇集』に至りては(者)、『觀經』『壽經』二部の(之)中に、諸行を説く(之)時は、證誠を見ず(不)。²³『阿彌陀經』に至りて念佛を説く(之)時、始めて證誠有り。故に世間流布の(之)經に約し餘行に(於)證誠無しと言ふか(歟)。二には(者)、但だ、念佛に約して之を證誠したまふか(歟)。但し『大乘莊嚴經』に至りては(者)彼の經の中に、念佛・餘行、俱に之を明かすと雖も、實には念佛に約して之を證誠したまふか(歟)。

第十五篇に、「六方の諸佛、念佛の行者を護念したまふ」とは(者)、『阿彌陀經』の如き、祇園精舎の(之)衆會、現座聽聞の(之)時、六方の諸佛、舌相を出して證誠を爲したまふ。又、如來滅後の(之)時、念佛行者の爲に諸佛、護念を加へたまふ。此れ則ち一佛一切佛の故、釋迦一佛、在世滅後の一切衆生の爲に念佛の法門を説きたまへば、六方の諸佛、同じく隨喜して之を護念したまふ。此の勝益、尤も憑むべ(可)し。何ぞ意を勵さざ(不)らんや(乎)。

あることについて。【問】質問する。『大乘無量壽莊嚴經』²²には、諸仏の眞實であるという証言を説き明かすとき、念仏についてもそれ以外のすべての行についても証言していることを説く。²³これはどういうことか。【答】答える。これについて二つの説がある。一つめは、念仏もそれ以外の行とともに眞實であると諸仏は証言されているのだからというものである。ただし『選擇集』では、『無量壽經』『觀無量壽經』には念仏とともに諸行を説くので、諸仏の証言の明文は見られないが、『阿彌陀經』には念仏のみが説かれるから始めて諸仏の証言がある。〔『大乘無量壽莊嚴經』に比べて〕世間に流布している經典について、念仏以外の行については証言がないとするのであろうとする。²⁴二つめは、ただ念仏についてのみ眞實であると証言するのだからというものである。ただし、『大乘無量壽莊嚴經』については、この經には念仏と念仏以外の諸行をとくに説いているが、その実、諸仏が眞實であると証言しているのは念仏のみであらう。

第十五篇に、「六方の諸仏が念仏の行者を思い護る」とあることについて、『阿彌陀經』には、祇園精舎において大衆が釈尊説法の會座についている時に、六方の諸仏が〔広長の〕舌を出して眞實であることを証明された。また、釈尊滅後の時の念仏行者のために²⁵諸仏が護念を加えられる。²⁶つまり、一仏がすなわち一切仏であるから、釈迦一仏が在世において、滅後のすべての衆生のために念仏の教えをお説きくださったならば、六方の諸仏は、釈迦仏と同様にそれに隨喜して釈迦滅後の衆生を護念してくださる。この勝れた利益は、もつとも頼みとすべきである。どうして心を勵まして念仏せずにいられようか。

第十六篇に、「釋迦如來、彌陀の名號を以て慇懃に舍利弗等に付屬したまふ」とは(者)、所謂る五濁増の時の衆生の(之)心は、甚だ以て荒亂不調なり(也)。罪業を造る事、尤も是れ多し。然るに此の五濁増の(之)中に於て念佛往生の(之)機有り。釋尊、佛眼を以て之を照して(而)、念佛を以て舍利弗等に付屬し、我が滅後に於て之を弘通すべ(可)しと付屬を與へたまへるなり(也)。已上、本『選擇集』に載する所の(之)十六篇、一一に之を釋し畢ぬ。

問ふ、上人の『選擇集』の中に幾くの選擇の義有りや(耶)。

答ふ、上人造る所の(之)『選擇集』に八種の選擇有り。其の八種の選擇とは(者)、『雙卷經』の中に三の選擇有り。一には選擇本願、二には選擇讚嘆、三には選擇留教なり(也)。「觀經」の中に又、三の選擇有り。一には選擇攝取、二には選擇化讚、三には選擇付屬なり(也)。次に『阿彌陀經』の中に一の選擇有り。所謂る選擇證誠なり(也)。「般舟三昧經」の中に又、一の選擇有り。所謂る選擇我名なり(也)。「已上」。總じて八種の選擇なり(也)〈委くハ『選擇集』の如し〉。

今、此の外に又、二十二種の選擇の(之)義を加ふ。

一には『雙卷經』に就きて又、一種の選擇有り。所謂る三輩往生の(之)下、諸行を選擇して一向の(之)言を置かず(不)、念佛を選

第十六篇に、「釈尊が阿彌陀仏の名号を丁寧(ていねい)に舍利弗等に授け与えられた」とあることについて。仏の滅後、時が経つにつれて五つの穢れが増大し、衆生の心は、ひどく荒れ乱れ調和がとれなくなっている。苦を受ける原因となる行為(罪業)を、とりわけ多く重ねている。しかしながら、この五つの穢れが増大した時代においても、念仏の教えを信じ、念仏を称えて極樂に往生する人たちがいる。釈尊は、仏眼によつて、このことを知り、念仏の教えを舍利弗に授け与えて、「私が入滅した後には、この念仏の教えを広めよ」と託された。以上、この『選択集』に記載されている十六篇の一一について解釈し終えた。

【問】質問する。法然上人の『選択集』の中に、いくつの選択の内容があるのか。

【答】答える。法然上人が造られた『選択集』には、八種の選択がある。その八種の選択とは、『無量寿經』の中に三種の選択がある。一つめは「選択本願」、二つめは「選択讚歎」、三つめは「選択留教」である。「觀無量寿經」の中に、また三種の選択がある。一つめは「選択攝取」、二つめは「選択化讚」、三つめは「選択付属」である。つぎに『阿彌陀經』の中に一種の選択がある。つまり「選択証誠」である。「般舟三昧經」の中にまた一種の選択がある。つまり「選択我名」である〈以上〉。あわせて八種の選択である。〈詳細は『選択集』のとおりである。〉

今、この他に更に二十二種の選択の内容を加える。

第一には、『無量寿經』についてまた一種の選択がある。つまり三輩往生を説く中で、諸行を選び捨て「一向」という文言を使わない。念

取して（而）一向の（之）言を置く。此れ則ち選擇一向の（之）義なり（也）。

二には『觀經』に就きて又、一種の選擇有り。所謂る下品三生は（者）十惡の罪人、破戒の罪人、五逆の罪人なり（也）。此れ等の罪人は罪障重きを以ての故に、諸佛の（之）淨土に於て更に選擇せら（所）る（也）。佛の本願を以ての故に、彌陀の（之）淨土に於て（而）之を選択したまふ（也）。此を以て之を案ずるに、餘善は是れ能治の法に非ず、念佛は是れ能治の（之）法爲り。當に知るべ（當…再読）し。下品三生は（者）選擇惡業待對の（之）義なり（也）。

三には『阿彌陀經』に就きて又、一種の選擇有り。所謂る小善根福德の因縁を選擇して、大善根福德の因縁を選択す。此れ則ち選擇大善の（之）義なり（也）。

四には『文殊般若經』中に就きて又、一種の選擇有り。所謂る相貌を選擇して、名號を選択す。此れ則ち選擇一行の（之）義なり（也）。

五には普賢菩薩に就きて一種の選擇有り。所謂る『華嚴經』に云く、「普賢菩薩、臨終の（之）時、十方淨土を選擇して、極樂淨土を選択す」。此れ則ち普賢菩薩選擇臨終の（之）義なり（也）。

六には、文殊菩薩に就きて一の選擇有り。所謂る『文殊發願經』に云く、「文殊菩薩、臨終の（之）時、十方淨土を選擇して極樂淨土を選

仏を選び取って「一向」の文言を置く。これはつまり「選択一向」という内容である。

第二には、『觀無量壽經』についてまた一種の選択がある。つまり、下品の上中下の三生は順に十惡の罪人、破戒の罪人、五逆の罪人である。これらの罪人は、罪障が重いので諸仏の淨土に選擇捨てられる（往生できない）。仏の本願によって、これらの罪人を選択し、阿彌陀仏の淨土に往生させてくださる。このことから考えると、念仏以外の善行はこれらの罪人の罪障を治すことができる教えではない。念仏は治すことができる教えである。必ず知っておかなければいけない。下品の三生は「選択惡業對待（惡業に對しての選択）」という内容である。⁽²⁹⁾

第三には、『阿彌陀經』についてまた一種の選択がある。つまり、少善根福德因縁を選擇捨て大善根福德因縁を選擇取る。これはつまり「選択大善」という内容である。

第四には、『文殊般若經』について、一種の選択がある。つまり、姿形を取ることを選択捨て、名號を選擇取る。⁽³⁰⁾これはつまり「選択一行」という内容である。

第五には、普賢菩薩について一種の選択がある。つまり『華嚴經』に、「普賢菩薩は臨終のときに、十方淨土を選擇捨て、極樂淨土を選擇取った⁽³¹⁾」と云う。これはつまり、「普賢菩薩選択臨終」という内容である。

第六には、文殊菩薩について一種の選択がある。つまり『文殊發願經』に、「文殊菩薩は臨終の時に、十方淨土を選擇捨て、極樂淨土を選

取す」。此れ則ち文殊菩薩選擇臨終の（之）義なり（也）。

七には、觀音菩薩に就きて一の選擇有り。所謂る『千手經』に云く、「我本師阿彌陀佛を念ずべし」と。當に知るべ（當…再読）し。餘佛を選擇して本師を選擇す。此れ則ち觀音菩薩選擇本師の（之）義なり（也）。

八には、勢至菩薩に就きて一の選擇有り。所謂る『大佛頂經』に云く、勢至菩薩の（之）本願は諸行を選擇して念佛を選擇して無生忍を得て極樂に往生す。此れ則ち勢至菩薩選擇因行の（之）義なり（也）。

九には、龍樹菩薩の『十住毗婆沙論』に就きて一の選擇有り。所謂る難行道を選擇して易行道を選擇す。此れ則ち選擇易行道の義なり（也）。又、龍樹菩薩所造の論に就きて又、一の選擇有り。所謂る阿彌陀佛先世の（之）時、法藏比丘と作て（而）麤惡を選擇し善妙を選擇して以て本願と爲す。此れ則ち、龍樹菩薩選擇本願の（之）義なり（也）。

十には、天親菩薩の『往生論』に就きて、一の選擇有り。所謂る五念門の中に於て第二讚嘆門は是れ彌陀の（之）名義なり（也）。非本願の（之）諸行に於ては（者）選擇して（而）之を讚嘆せず（不）。本願と爲るの（之）名義に於ては（者）選擇して（而）之を讚嘆す。此

選り取る³²」と云う。これはつまり「文殊菩薩選擇臨終」の内容である。第七には、觀音菩薩について一種の選択がある。つまり『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』に「私を親しく導いてくださった師（本師）である阿彌陀仏を念ずべし³³」と云う。阿彌陀仏以外の諸仏を選び捨て、本師である阿彌陀仏を選び取ったことを、必ず知っておかなければいけない。これはつまり「觀音菩薩選擇本師」という内容である。

第八には、勢至菩薩について一種の選択がある。つまり、『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩萬行首楞嚴經³⁴』に、「勢至菩薩の本願は、念仏以外の諸行を選び捨て、念仏を選び取って、あらゆるものに生滅はないという真実を悟って極樂に往生する」と云う。これはつまり「勢至菩薩選擇因行」という内容である。

第九には、龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』に一種の選択がある。つまり、難行道を選び捨て、易行道を選び取る。これはつまり「選擇易行道」という内容である³⁵。また、龍樹菩薩が造った『大智度論³⁶』にも、一種の選択がある。つまり、「阿彌陀仏が先仏である世自在王仏の世において法藏比丘となり、粗末で悪い国土を選び捨て、善くてうるわしい国土を選び取ったことを本願とした」とある。これはつまり「龍樹菩薩選擇本願」という内容である。

第十には、天親菩薩の『往生論』について一種の選択がある。つまり五念門の中の第二讚嘆門は阿彌陀仏の名とその内容を讚嘆する³⁷。本願にない諸行は選び捨て讚嘆せず、本願である「阿彌陀仏の」名とその名に込められた内容（名義）を選び取って讚嘆した。これはつまり

れ則ち選擇名義讃嘆の（之）義なり（也）。

十一には、匡廬山の慧遠大師に就きて一の選擇有り。所謂る慧遠大師、若干三藏の（之）教法を習學すと雖も、其中に於て諸行を選捨し、念佛を選取して（而）我が得度の（之）要法と爲す、此れ則ち選擇得度念佛の（之）義なり（也）。

十二には、曇鸞法師に就きて一の選擇有り。所謂る菩提流支三藏、曇鸞法師に對するの（之）時、長生不死の（之）法と號して（而）『觀經』を與へ畢ぬ。法師、此の經を學得して諸行を選捨し念佛を選取して往生の（之）望を遂ぐ。此れ則ち、選擇長生念佛の（之）義なり（也）。加之（しかのみ）ならず曇鸞法師の（之）義に就きて三の選擇の義有り。所謂る一には（者）諸行に於ては在心の（之）義無し。故に之を選捨し、念佛に於ては在心の（之）義有り。故に之を選取す。此れ則ち選擇在心の（之）義なり（也）。二には（者）諸行に於ては在縁の（之）義無し。故に之を選捨し、念佛に於ては在縁の（之）義有り。故に之を選取す。此れ則ち選擇在縁の（之）義なり（也）。三には（者）諸行に於ては在決定の（之）義無し。故に之を選捨し、念佛に於ては在決定の（之）義有り。故に之を選取す。此れ則ち選擇在決定の（之）義なり（也）。

十三には、天台大師に就きて一の選擇有り。所謂る『天台の別傳』に云く、「念佛は是れ火車の相現ずるとき、能く改悔するの（之）法なり（也）」と。餘行は是れ火車の相現ずるとも能く改悔するの（之）法に非ず。是を以て不能改悔の（之）法を選捨し能改悔の（之）法を

「選択名義讃嘆」という内容である。

第十一には、匡廬山慧遠大師について一種の選択がある。つまり、慧遠大師は広く經・律・論の三藏について習學したが、その中で念仏以外の諸行を選び捨て、念仏を選び取り、念仏こそ自身の悟りへの肝要な教えとした。³⁸これはつまり「選択得度念仏」という内容である。

第十二には、曇鸞法師について一種の選択がある。つまり、菩提流支三藏が曇鸞法師に對面したとき、長生不死の教えとして『觀無量壽經』を与えた。曇鸞法師は、この經を学び内容に得心して、諸行を選び捨て、念仏を選び取り、望み通り往生を遂げた。これはつまり「選択長生念仏」という内容である。それだけでなく、曇鸞法師の選択の内容について、さらに三種の選択がある。つまり、第一には、諸行には在心という内容はない。ゆえに諸行を選び捨てる。念仏には在心の内容がある。ゆえに、念仏を選び取る。これはつまり「選択在心」という内容である。第二には、諸行には在縁という内容はない。ゆえに諸行を選び捨てる。念仏には在縁の内容がある。ゆえに念仏を選び取る。これはつまり「選択在縁」という内容である。第三に、諸行には在決定の内容はない。ゆえに諸行を選び捨てる。念仏には在決定の内容がある。ゆえに念仏を選び取る。これはつまり「選択在決定」という内容である。³⁹

第十三には、天台大師智顗について一種の選択がある。つまり、『隋天台智者大師別傳』に「臨終の時に〔地獄に引きつれていく〕火車のすがたが現れても、念仏によつて悔い改めると地獄に墮ちることから免れることができる教えである⁴⁰」と云う。火車のすがたが現れたとき、

選取して（而）『十疑論』を造て専ら念佛を弘るなり（也）。此れ則ち天台大師選擇改悔念佛の（之）義なり（也）。

十四には、道綽禪師に就きて一の選擇有り。所謂る并州に於て男女の（之）羣類を聚めて得道の（之）要法を弘むるの（之）時、萬法を捨し念佛を選取して（而）之れを弘通したまふ。此れ則ち、道綽禪師選擇念佛の（之）義なり（也）。

十五には、善導和尚に就きて一の選擇有り。所謂る末法の（之）衆生の爲に往生の要法を弘むるの（之）時、非本願の（之）雜行を選捨し本願爲（た）るの（之）念佛を選取す。此れ則ち善導和尚選擇本願念佛の（之）義なり（也）。

十六には、懷感禪師に就きて一の選擇有り。所謂る此の感師は（者）善導同時の（之）人なり（也）。未だ對面せざ（未…再讀）るの（之）間は法相の（之）法門を帶て（而）善導の（之）念佛を破すと雖も、已に對面の（之）時、善導の口従り光明の出づるを見、化佛を現じたまふを拜し、忽ち善導に歸して（而）諸行を選捨し正しく念佛を選取す。此れ則ち懷感禪師選擇見佛念佛の（之）義なり（也）。

十七には、少康法師に就きて一の選擇有り。所謂る烏龍山に於て三級の（之）壇を築き四部の（之）衆を集め念佛行道せし（令）め、諸行を選捨し念佛を選取して（而）之を興隆す。此れ則ち少康法師選擇興

念仏以外の行によつて悔い改めても、地獄に墮ちることから免れることができない。これによつて、悔い改めても地獄の果報から免れることのできない教えを選び捨て、免れることができる教えを選び取り、『浄土十疑論』を撰述し、ひとえに念仏を弘めた。これはつまり「天台大師選択改悔念仏」の内容である。

第十四には、道綽禪師について一種の選択がある。つまり、并州玄中寺において、男女の別なく多くの民衆を集めて、悟りへの大切な教えを弘めたとき、「念仏以外の」さまざまな教えを選び捨て、念仏を選び取つて広く教化した。これはつまり「道綽禪師選択念仏」という内容である。

第十五には、善導和尚について一種の選択がある。つまり、末法の衆生のために、往生という重要な教えを弘めたとき、阿弥陀仏の本願でない念仏以外の雑多の行を選び捨て、本願である念仏を選び取った。これはつまり「善導和尚選択本願念仏」という内容である。

第十六には、懷感禪師について一種の選択がある。つまり、懷感禪師は、善導と同時期の人である。善導に出会うまでは、法相の教えを信奉して善導の念仏の教えを非難していたが、善導に出会ったとき、善導の口から光明が出るのを見て、また化仏を出現させるのを拝し、たちまち善導に帰依して、念仏以外の諸行を選び捨て、念仏を選び取った。これはつまり「懷感禪師選択見仏念仏」という内容である。

第十七には、少康法師について一種の選択がある。つまり、烏龍山において「浄土の道場を建て」三級の壇を築き、出家在家の男女を集めて念仏行道を行い、念仏以外の諸行を選び捨て、念仏を選び取つて興

隆念佛の（之）義なり（也）。

十八には、法照禪師に就きて一の選擇有り。所謂る『大聖竹林寺記』に云く、「法照禪師、五臺山大聖竹林寺に參詣して普賢文殊の（之）二菩薩に値ひ奉り、末法の衆生の爲に得度の（之）要法を問ひたまふに、普賢文殊並に法照禪師の（之）問に答へて、諸行を選擇し念佛を選擇して（而）末法得度の（之）要法なりと教へたまふ」。此れ則ち法照禪師選擇末法念佛の（之）義なり（也）。

十九には、慧日三藏に就きて一の選擇有り。所謂る慧日三藏天竺に入るの（之）時、印度の（之）諸衆、偏へに念佛を興す。之に依りて歸朝の（之）後、諸行を選擇して念佛を選擇す。此れ則ち慧日三藏選擇念佛の（之）義なり（也）。

二十には、大智律師に就きて一の選擇有り。所謂る此の律師は是れ本と則ち四分律の（之）學匠なり（也）。然るに四分の戒律を置き天台上乘の（之）法に入りて（而）之を學する間に、身に重病を受く。病中に發願す。若し今度び病差（い）ゑて存命せば淨土門に入り念佛を修すべ（可）しと（云云）。願の如く病差ゆるの（之）後、上乘と戒との（之）二法を選擇し念佛の（之）一行を修す。此れ則ち大智律師の選擇病中念佛の（之）義なり（也）。

二十一には、慧心先德に就きて一の選擇有り。所謂る慧心の『要集』に云く、「諸行に於ては（者）利智精進の（之）人の爲なり（也）。予が如き頑魯の者は念佛の（之）一門に依るべし」と。經論の（之）要

隆を圖つた。これはつまり「少康法師選択興隆」という内容である。

第十八には、法照禪師⁽⁴³⁾について一種の選択がある。つまり、『大聖竹林寺記』⁽⁴⁴⁾に「法照禪師は、五臺山大聖竹林寺に參詣して文殊菩薩・普賢菩薩の二菩薩に對面し、末法の衆生のための悟りへの肝要な教えを尋ねると、普賢菩薩も文殊菩薩ともに法照禪師の問に答えて、諸行を選擇捨て、念仏を選擇取つて末法における悟りに至る肝要な教えであると教えられた⁽⁴⁵⁾」と云う。これはつまり「法照禪師選擇末法」という内容である。

第十九には、慈愍三藏⁽⁴⁶⁾について一種の選択がある。つまり、慈愍三藏がインドに渡ったとき、インドの仏教徒たちの間では念仏が盛んに行われていた。これによつて、中国に帰国後、念仏以外の諸行を選擇捨て、念仏を選擇取つた。これはつまり「慧日三藏選択念仏」という内容である。

第二十には、大智律師元照について一種の選択がある。つまり、この律師は⁽⁴⁷⁾、もと四分律の學者である。ところが、四分律をはなれて天台一仏乗⁽⁴⁸⁾の教學に入門し學んでいる間に重病に罹つた。病の中で、「もしこの病が癒え命を長らえたならば、必ず淨土門に入り念仏を修そう云々」と發願した。この願の通り、病が癒えた後、天台一乗と四分律の二つの教えを選擇捨て、念仏の一行を〔選擇取つて〕修した。これはつまり「大智律師選擇病中念仏」という内容である。

第二十一には、恵心僧都について一種の選択がある。つまり、『往生要集』に「諸行は智慧がすぐれ精進できる人のための修行である。私のように愚かな者は念仏の教え一つに依るべきである⁽⁴⁹⁾」と云い、經論の

文を集めて（而）諸行を選捨し正しく念佛を選取す。此れ則ち、慧心先徳選擇念佛往生の（之）義なり（也）。

二十二には、法然上人に就きて一の選擇有り。所謂善導和尚の本願念佛の（之）義を以て其の根本と爲し、而も經論を見て其の本願の（之）義の上に復た選擇の（之）義を加ふ。此れ則ち法然上人選擇本願念佛の（之）義なり（也）。已上、二十二種の選擇の（之）義畢ぬ。問て曰く、本『選擇集』の中に稱名念佛往生を明すこと其の義已に足りぬ。今又、重ねて『徹選擇集』を造ること、何の要用有りや（耶）。答て曰く、此の書を造るに二意有り。所謂一には（者）先師上人の（之）廣學博覽の（之）智徳を顯はさんが爲なり（也）。二には（者）濁世末代の（之）小智愚鈍の迷惑を救はんが爲なり（也）。一に上人の（之）廣學博覽を顯はさんが爲とは（者）、小僧某甲、上人の御手よ（自）り未だ此の選擇を傳へざ（未…再読）る以前、上人予に向て具に以て告て言く、世人皆な因縁有て道心を發す（也）。所謂る父母兄弟に別れ妻子朋友に離る等なり（也）。然るに源空は指せる因縁も無く法爾法然に道心を發す。故に師匠名を授けて（而）法然と號す。出離の（之）志し至て深き（之）間、諸の教法を信じて諸の行業を修す。

凡そ佛教多しと雖も所詮は戒定慧の（之）三學に過ぎず（不）。所謂

重要な文を集めて、「念仏以外の」諸行は選り捨て、念仏を選り取った。これはつまり「恵心先徳選択念仏往生」という内容である。

第二十二には、法然上人について一種の選択がある。つまり善導和尚の本願念仏の教義を根本に置き、さらに經論を見てその本願の教義の上に選択の意味を加えた。これはつまり「法然上人選択本願念仏」の内容である。以上が二十二種の選択の内容すべてである。

【問】質問する。この『選択集』の中で稱名念仏による往生について明らかにしており、もはや十分である。今また、重ねて『徹選擇集』を造るのは、どういう必要があつてのことか。【答】答えて云う。この書（『徹選擇集』）を造る意味が二つある。第一には、先師法然上人の、広く學識を求め、多くの書物を読まれて得られた（廣學博覽）智慧と高い徳を明らかにするためである。第二には、乱れた末世の小賢しい智慧を誇る愚鈍な者の迷いを救うためである。〔第一の〕法然上人の廣學博覽を明らかにするためとは、この私（弁長）は、法然上人ご自身の手からこの『選擇集』を伝授される前に、法然上人が私に向かつて詳しくつぎのようにおっしゃった。「世の人々は、皆、それぞれ理由があつて、仏道を志す心を起す。つまり、父母兄弟に別れたり、妻子友人と離れたりするなどの理由である。ところが私（源空）は、それほどの理由もなく、自然の成り行きで仏道を志した⁵⁰。したがつて、師匠は《法然》という名を授けてくださった。迷いを離れて悟りに至りたいと云う志はとても深く、さまざまな教えを信じて、いろいろな修行をした。

およそ仏の教えは数多くあるが、つまるところ惡を止め善を修し戒律

る小乗の（之）戒定慧・大乘の（之）戒定慧・顯教の（之）戒定慧・密教の（之）戒定慧なり（也）。然るに我が此の身は、戒行に於て一戒をも持たず（不）、禪定に於て一つも之を得ず（不）、智慧に於ては斷惑證果の（之）正智を得ず（不）。然るに戒行の（之）人師釋して云く、尸羅清淨ならず（不）んば三昧現前せず（不）と（云云）。又、凡夫の心は物に隨ひて移り易きこと、譬へば猿猴の如し。實に以て散亂動じ易く一心靜まり難し。無漏の（之）正智、何に因りてか發すことを得ん。若し夫れ無漏の（之）智劍無くんば（者）如何んが方に惡業煩惱の繩を斷ぜんや（乎）。惡業煩惱の繩を斷ぜざ（不）れば（者）何ぞ生死繫縛の（之）身を解脱することを得んや（乎）。悲しきかな（哉）悲しきかな（哉）何が爲ん何が爲ん。爰に予が如きは（者）已に戒定慧の三學の（之）器に非ず。此の三學の外に我が心に相應する（之）法門有りや（耶）。此の身に堪能なる（之）修行や有りや（耶）と。萬人の（之）智者に求め、一切の（之）學者を訪へども、之を教ゆる人無く、之を示す倫がら無し。然る間、歎き歎き、經藏に入り悲しみ悲しみて、聖教に向ひ手づから自づから之を披きて之を見るに、善導和尚の『觀經の疏』に云「一心專念彌陀名號・行住坐臥・不問時節久近・念念不捨者・是名正定之業・順彼佛願故」と云へる文を見得るの（之）後、我れ等が如き無智の（之）身は、偏へに此の文を仰ぎ専ら此の理を憑み、念念不捨の（之）稱名を修して決定往生の（之）業因に備ふれば、啻だ善導の（之）遺教を信ずるのみに非ず。亦、厚く彌陀の（之）弘願に順ず。「順彼佛願故」の（之）文、神に染み心に留るのみ（耳）。

を守る戒の修行、禪定の修行、智慧を磨く修行の三つの修行（戒定慧の三學）以外にない。つまり小乗仏教においても、大乘仏教においても、顯教においても、密教においても、それぞれの戒定慧の修行をする。ところが私自身は、戒の修行においては一つの戒ですら守ることができず、禪定においては一つも体得することができず、智慧の修行においては煩惱を斷ち切り悟りを得る正しい智慧を得ることができない。戒行に精通しているある高僧の解釈に、『戒が清淨でなければ、対象に心を集中させて仏が目の前に現れる境地を得ることはできない云々』と云う。また、凡夫の心は認識の対象にゆり動かされて移ろいやすい。例えば、猿「が枝から枝へ移っていく」ようなものである。本當に散亂して動きやすく心を靜めることは難しい。「そんな私に」煩惱に染まっていけない正しい智慧は、どうして起こすことができるだろうか。もし惡業や煩惱の繩を斷ちきることができなければ、どうして生死の迷いの境涯に縛りつけられているこの身をのがれることができるであろうか。まことに悲しいことである。本當にどうすればよいだろうか。そこで、『私のような者は、もはや戒定慧の三種の修行をする能力を備えていない。この三種の修行以外に、私のような者の心にふさわしい修行はあるだろうか。私のような者にも可能な修行はあるだろうか』と、多くの智者に教えを求め、すべての學者を訪ねてはみたが、このことについて教えてくれる人は無く、示してくれる仲間もいなかった。そこで、歎きながら經藏に入り、悲しみながら仏典に向かい、自ら手に取り開いて見たところ、善導和尚の『觀經疏』の《心を一つにしてひたすら阿彌陀仏の名号を念じ、歩くときも止まっ

其の後又、慧心先徳の『往生要集』の文を披くに、「往生の（之）業には念佛を本と爲^す」と云へり。又、慧心の『妙行業記』の（之）文を見るに、「往生の（之）業には念佛を先と爲^す」と云へり。覺超僧都、慧心僧都に問て云く、「汝が行ずる所の（之）念佛は是れ事を行ずとや爲ん、是れ理を行ずとや爲ん、如何ん」と。慧心僧都、答へて云く、「心萬境に遮えらる。是を以て我れ但だ稱名を行ず（也）。往生の（之）業には稱名尤も足りぬ。之に依りて、一生の念佛、其の員數を勘ふるに二十俱胝返なり（也）（云々）。然れば則ち、源空も大唐の善導和尚の（之）教に隨ひ、本朝慧心先徳の（之）勧めに任せて稱名念佛の（之）勤^{つとめ}、長日六萬返なり（也）。死期漸く近づくに依りて又、一萬返を加へて長日七萬返の（之）行者なり（也）と。此の如く慥かに以て嚴訓を蒙り畢ぬ。上人の解行賢徳、蓋し以て斯の若し。

ているときも、坐っているときも横になつているときも、時間の長短は關係なく、片時もやめないこと、これを正しく定まつた行いと名づける。それは阿弥陀仏の願に順^{したが}つてゐるからである」と云う文を見つけてからは、私たちのような無智の者は、ひたすらこの文を仰いで、もっぱらこの道理を頼みとし、片時もとぎれることのない称名念仏を修して、往生が決定づけられる因として準備することは、ただ善導の遺した教えを信じるということだけではなく、阿弥陀仏の広く衆生を救おうという願に順^{したが}うことになる。《阿弥陀仏の願に順っているからである（順彼仏願故）》の文言は、ただもう、たましいに染みこみ、心に留まるのみである。

その後、恵心僧都源信の『往生要集』の文を披見すると、「往生の業には念仏を本とする」^⑤と述べられている。また同じく恵心僧都源信の『妙行業記』の文を見ると、「往生の業には念仏を先とする」と云う。覺超僧都が恵心僧都に「あなたが行じる念仏は、事觀の念仏か、理觀の念仏か、どちらか」と質問した。恵心僧都は、「心はあらゆる対象が障害となる。したがって、私はただ称名念仏を行じる。往生のための行は、称名こそ最もふさわしい。これによって、一生の念仏の数を計算すると二億返^④になる（云々）」と答えた。そこで、私（法然上人）も、唐の善導和尚の教えに隨ひ、日本の恵心僧都の勧めに委ねて、称名念仏を常に一日六万返勤めた。死期がだんだん近づいてきて、さらに一万返を加えて一日七万返の行者となつた」と。このように、「師法然上人から」明確に厳しい教えをいただいてきた。法然上人を仏教に対する深い理解と厳しい行と智徳は、まさしく以上の通りであ

弟子某甲、忝くも法然上人の（之）在世に遇ひ奉り、親しく稱名念佛の（之）義理を習ひ傳へ、専ら稱名を修し、偏へに往生を期するの（之）間、上人又告げて言く、「我が所造の（之）書有り。所謂る『選擇本願念佛集』是れなり（也）。此の書を以て秘かに汝に傳へんと欲す（也）。此の書の（之）造意は（者）九條の殿下、源空に向ひ（而）高命を示して云く、『對面の（之）次（ついで）の毎に念佛往生の（之）義、度度之を聞くと雖も即施即廢なり（也）。請ふ、其の文を註して予に賜はれ』と（云云）。源空、此の仰せを蒙り、辭し申すこと能はず（不）。茲れに因りて、善導の（之）釋義を謹みて以て其の文勢を記し、兼ねて又、其の義勢を陳ぶ。然れば則ち、『選擇』の後序に云く、『而今圖らざ（不）るに仰せを蒙る。辭謝するに地無し。仍りて今、慙いに念佛の要文を集め、剩へ念佛の要義を述ぶ。唯、命旨を顧みて不敏を顧みず（不）。是れ即ち無慙無愧の（之）甚しきなり（也）。庶幾は一たび高覽を經るの（之）後、壁底に（于）埋めて、窓前に遺すこと莫れ。恐く破法の（之）人をして惡道に（於）墮せし（令）めん（也）』〔已上〕。已に此の集を造り畢て以て殿下に進ず。殿下、上人に告て言く、『今、此の書は（者）淨土宗の（之）奧義なり（也）。上人在世の（之）時、禪室草菴従り披露せし（令）むること勿れ。大師入滅の（之）後、博陸槐門従り之を弘通すべ（可）し』。源空、此の炳誠を蒙ると雖も、露命定め難く、今日死せんも知れず（不）明日死せんも知れず（不）。故に此の書を以て密かに汝に付屬す。外聞に及ぶこと勿れと（云云）。

る。

法然上人の弟子である私は、畏れ多くも法然上人の在世にお目にかかり、直接稱名念仏の教えの道理を伝え習い、ひたすら稱名を修して、ただ往生しようと心に決めているとき、上人が、次のように仰せられた。「私が造った書がある。すなわち『選擇本願念佛集』である。この書を秘かにあなたに伝えよう。この書を造ろうと思ったのは、九条兼実公が私（法然上人）に向かつて、つぎのように命じられた。『お目にかかるたびに、念仏往生の教えを何度も聞いてきたが、教えていただいた途端に忘れてしまう。どうか、念仏往生の教えの肝要な文章に説明を加えて、私に与えたまえ云々』と。私（法然上人）はこのお言葉をいただいて、辞退することはできなかった。これによって、善導の解釈の文を誤らないよう氣をつけて記し、その内容を説明した。つまり、『選擇集』の後序には、次のように記している。『しかるに今はからずも（九条兼実公の）仰せを受けた。辞退の余地はない。そこで今、心の進まないまま強いて念仏に教えの肝要な文章を集め、そのうえ念仏の肝要な意義を述べた。ただ仰せの趣旨を顧みるのみで、自分の愚かさを顧みていない。これはとりもなおさず、恥知らずも甚だしいことである。どうか一度ご覧になった後は、壁の底に埋めて窓の前に残さないでほしい。〔本書を読み、念仏の〕教えを誇る人が、三惡道に墮ちることを恐れるからである』〔以上〕。〔上人は〕すでにこの『選擇集』を著述して、兼実公に進呈された。兼実公は法然上人に、『今、この書は淨土宗の奧義である。上人がご在世の間は、〔私が〕仏教にたしなむこの草庵から外に公開させない。上人がご入滅の後には、

爰に弟子某甲、低頭舉手し、合掌恭敬して跪て以て之を賜はり畢ぬ。
歡喜身に餘り、隨喜心に留まる。伏て以れば、報じ難く、仰で以れば
謝し難し。畜だ義理を口決に（於）傳ふるのみに非ず、復た造書を眼
前に（於）授けら（被）る。解行本づくこと有り、文義已に足れり。
其れよ（自）り以降（このか）た、往生の（之）願彌（いよいよ）深く、念佛の
（之）行倍（ますます）高し。然るを窮老の微質圖らざ（不）るに存命し、念佛
（之）暇に當り、行法の（之）隙を瞻て、一切經藏を披き、優婆提舍
を覽（み）るに、選擇の（之）正文、經敎の（之）説に相應し、念佛の
（之）妙義、論家の（之）釋に違ふこと無し。計り知ぬ。上人博覽の
（之）智、得て（而）稱すべ（可）からざ（不）る者なり（也）。

二には、濁世末代の（之）小智愚鈍を救はんが爲とは（者）、末法の
（之）習ひ、昨日も今日も僅かに戒定慧三學の（之）名有りと雖も、
戒定慧の（之）行人無し。乗急の（之）智者無し。但だ是れ有名無實
なり（也）。設ひ至極上乘の（之）法門を翫べども、更に斷惑證理の
（之）智慧に非ず。此れは是れ、問答料簡の（之）智慧なり（也）。
此の智慧を以ては生死を出で難きか（乎）。然れば則ち、釋尊出世の

関白太政大臣邸より外にこの書を弘めるべきである」と仰せられた。
私（法然上人）は、この仰せを⁵⁶いただいたとはいえ、露のようにはか
ない命は無常であり、明日死ぬかもしれない。だから、この書を秘か
にあなたに預ける。他の人に漏らしてはいけない（云々）」と。

そこで、法然上人の弟子である私は、頭を下げ手を挙げて合掌し恭し
く跪いてこの書をいただいた。歡喜は身に余り、隨喜の気持ちには心に
留まった。地に伏しても、報いることの難しさと思い、天を仰いでも、
感謝しつくすことの難しさ⁵⁷を思った。ただ敎えの道理と内容を口で伝
えられるだけでなく、その述作を眼前に授けられた。そこには、敎え
に対する理解と修行の根本があり、文の内容はもはや十分である。

『選択集』を授かつて以降は、往生の願いはいよいよ深くなり、念仏
の行にますます励んだ。ところが、年老いて衰えた上に資質の低い私
は、思いもよらず命を⁵⁸長らえ、念仏の暇^{いそぎ}を探し、修行の合間を見つ
けて、一切經の經藏を開いて、敎理の注釈書を見ると、『選択集』の
本文は、經典に説かれる敎えに相応し、念仏のすぐれた内容は、論書
の注釈に反することは無かった。上人の多くの書物を読んで得られた
智慧は称えつくすことはできないことを計り知る。

（この『徹選擇集』を『選択集』に重ねて造る理由の）第二の、乱れ
た末世の小賢しい智慧を誇る愚鈍な者の迷いを救うためとは、末法の
世においては、昨日も今日も、戒定慧の三學の名はあるとしても、そ
れを修行する人がいないのが普通である。仏の敎えによって智慧を磨
くの⁵⁹に専心努力する智者はいない。ただ名ばかりで実質がない。たと
えこの上もない大乘の敎えに精通していたとしても、煩惱を断じ悟り

(之) 本意に任せ、彌陀超世の(之) 悲願を仰ぎ、聖道の(之) 難行を捨て、淨土の(之) 易行を取り、専ら名號を稱へて往生を願ずべ(可) きなり(也)。之に依りて善導釋して云く、一萬從り十萬に至ると、又云く、「三萬六萬十萬者皆是上品上生人」と。此れ等の文に就きて、上人在世の(之) 時の如く若干の(之) 稱名を勵むべ(可) きなり(也)。然るに近代念佛の義者の(之) 中に、先師の(之) 一門と號し乍ら、此の『選擇集』を抛て今案の私義を立つる(之) 間、異義蘭菊にして(而) 邪徒紛紛たり。

有人の云く、若し其の義を解せず(不) して(而) 稱名を行ぜば(者)、譬へば牛の吼ゆるが如く亦、犬の鳴くに似たり。只是れ畜生の(之) 念佛なり(也)。是の故に、念佛者は當に文を學して(而) 義を解すべ(當…再讀) し(也)」と(云云)。之に依りて、彼れ、學文を得たる(之) 人と號して(而)、諸國に亂入して數返を止め稱名を失する事淺猿し淺猿し、無慚なり無慚なり。此れ則ち、第六天の(之) 魔民なり(也)。彌陀佛の(之) 怨敵なり(也)。故に法然上人の言く、我れは是れ無智の(之) 身なり(也)。我れは是れ破戒の身なり(也)。然りと雖も彌陀本願口稱念佛の(之) 力に依りて決定往

を開く智慧では無い。これは、問答し考察する智慧である。この智慧では、生死の迷いの境界から抜け出すことは難しいだろう。そうであれば、釈尊がこの世に出でられた本意に順い、阿弥陀仏の世に超えた大慈悲による誓願を仰いで、聖道門の難行を捨てて、淨土門の易行をとり、ひたすら「阿弥陀仏」の名号を称えて往生を願うべきである。このことから、善導は、「一万遍より十万遍にいたるまで「阿弥陀仏の名を念ずる者は大功徳利益がある」⁽⁶⁴⁾」と解釈して云う。また、「一日に」三万あるいは六万あるいは十万遍もの念仏を称える者は、みな上品上生の人である⁽⁶⁵⁾と云う。これらの文を抛り所として、法然上人ご在世のときのように、多くの称名念仏に勵むべきである。ところが近頃の念仏の教義を唱える者の中には、先師法然上人の一門であると触れ回りながら、この『選擇集』を投げ打って、今新しく思いついた自分勝手な教義を立てたので、異なる教義が蘭の花や菊の花が競い合⁽⁶⁶⁾って咲き茂るように乱立して、邪義を唱える流派が入り乱れている⁽⁶⁸⁾。ある人は、「もしその意味内容を理解しないで称名を行じたらば、牛が吠えるのと同じであり、また犬が鳴くの似ている。これはただ畜生の念仏である。したがって、念仏者は「經論を」⁽⁶⁷⁾學んで、「念仏の」意味内容を理解すべきである云云」と云う。こういうわけで、彼は仏教についての学問をよく修めた人であると称して、諸國に押し掛けて、⁽⁶⁹⁾数を重ねる念仏を止め、称名を否定していることは、まことに情けない⁽⁷⁰⁾。本心に恥知らずである。これはつまり、第六天の魔王の民である。阿弥陀仏に恨みを持つ敵である。ゆえに法然上人は、「私は、無智の身である。私は、破戒の身である。そうではあるが、阿弥陀仏

生を遂ぐべ(可)し(也)と(云云)。之を聞き傳ふる人、各各に勇
みを成し面面に悦を致し、百人は百人乍ら口稱を勤め、千人は千人乍
ら數返を行ず。設ひ螢火一分の(之)智有りと雖も、須く癡闇無才の
(之)身と思ひ成すべ(須…再読)し。何ぞ下愚の(之)卑しき身を
以て(而)上智と誇て慢心せんや。拙なるかな(哉)拙なるかな
(哉)。末代の愚人、淨土の(之)法門に暗くして、念佛の(之)義
道に迷ひ、祖師の(之)珠玉を捨て、己身の(之)瓦礫を握ること、
痛しいかな(哉)痛しいかな(哉)。當世の(之)學者、選擇の(之)
眞文正義を抛て、自己の廻文曲義を挟み、世間を誑惑し行者を迷亂す
ること、罪業の(之)至り、何事か之に如かんや。恐るべ(可)し恐
るべ(可)し、悲しむべ(可)し悲しむべ(可)し。早く佛道の
(之)正路に趣き、迷惑の(之)邪執を改め、謗師謗法の(之)罪業
を懺悔し、椎撲地獄の(之)苦患を免るべ(可)し。南無阿彌陀佛。
南無阿彌陀佛。返す返す、先師上人の『選擇集』を以て(而)指南と
爲し、又、依憑に仰ぎ、無間に精進して、懈怠無く疎略無く、口稱の
念佛を行じて、慥かに以て極樂に往生すべ(可)し(也)。此れは則
ち末法の(之)迷者を哀むなり(也)。

時に(于)嘉禎三年、歳は丁酉に^{よど}次る六月十九日、安居念佛中、先師

の本願である口称念仏の力によつてかならず往生を遂げることができ
る云云」と仰せられた。これを聞き伝える人は、それぞれ心を励まし、
おのおのが悦んで、百人は百人とも口称念仏を勧め、千人は千人とも
数を重ねる念仏を行じる。たとえ、螢の光のように幽かな智慧があつ
たとしても、必ず愚かで何の才覚もない自身であると思ふべきである。
どうして、能力の劣つた愚か者である卑しいこの身を、すぐれた智慧
者と誇つて慢心するだろうか。まことに愚かである。末法の世の愚か
な者が、淨土の教えに暗く、念仏の教えの道に迷ひ、祖師の残した珠
玉を捨てて、自分自身が作り出した瓦礫を握っている、本当に痛まし
いことである。近頃の仏教を学ぶ者が、「選択」という眞実に経文に
説かれている正しい教義を投げ打ち、自分が作り出し経文を翻した振
じ曲げた解釈を挟んで、世間をだまし⁽⁷³⁾まどわして仏道を修行する者を
迷ひ混乱させることは、最も深い罪業であり、他のどんな罪が、これ
に及ぶだろうか。よくよく恐れべきである。よくよく悲しむべきであ
る。早く仏道の正しい方向に向かつて進み、迷ひ惑ひによる謬つた固
執を改め、師を誹謗し教えを誹謗する罪業を懺悔し、椎撲地獄⁽⁷⁴⁾に墜ち
て受ける苦しみを免れるべきである。南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏。
重ね重ね、先師法然上人の『選択集』を指南とし、拠り所として仰ぎ、
絶え間なく精進し、怠ることなく疎かにすることなく、口称の念仏を
行じて、間違ひなく極樂に往生すべきである。これはつまり末法の迷
える者に対する哀れみである。⁽⁷⁵⁾

時は嘉禎三年(一二三七)、丁酉(ひのととり)の歳六月十九日、安

報恩の爲、末法哀愍の爲に之を記す

徹選擇本願念佛集（上終）

- (1) 所謂…所謂…「所謂」は、「いはゆる」と訓読される。現代語で「いわゆる」は「世間で」といわれている」という意味であるが、漢文では、「いふところは」と訓読し、「と謂うところのもの」という意味の場合もある。つまり、世間以外の主語をとる場合である。例えば、本訳後半部分の二十二選択の解釈において、「〇〇に就きて一の選択あり。所謂」という定型文が出てくる。この「所謂」は、「〇〇について一つの選択がある。一つの選択と謂うところのものは」とあるの意味で用いられていると考えられる。したがって、本訳では、「所謂」を、「世間で言われている」という意味の場合はそのまま「いわゆる」とするほか、「と謂うところのもの」の意味では、「つまり」または「すなわち」を訳語として充てている。
- (2) 妙瑞『徹選擇私志記』巻中では、道光『選擇大綱抄』下（『浄全』八・六一頁下十六〜十七行）を引いて、「浄土宗に於て宗義を立つる者は、源と當章の經及び釋の文に依る。緯（こと）に是れ甚深なり。聊爾にすべからず。傳へ聞く云々」（『浄全』八・一六六頁上八〜九行）と解説する。「當章の經及び釋の文」とは、『観無量寿經』の付属の文と『観經疏』の「一心專念」の文のことである。
- (3) 『観無量寿經』の經文には、この文言はなく、取意である。
- (4) 善導『観經疏散善義』、『浄全』二・七一頁下三〜四行。この部分の訓読は、『浄全』の送り仮名に従わず、『観經疏』及び『選択集』で通常読みなれている訓読を用いた。
- (5) 名号…妙瑞『徹選擇集私志記』巻中に、『大論』十二・二丁に云く、「體を召して名と曰ふ、徳を表して號と曰ふ。名は別、號は通なり云

居念仏中に、先師法然上人への報恩のため、また末法の迷える者に対する哀れみのためにこれを記す。

徹選択本願念佛集（巻上終わる）

- (6) 菩提心願行…良忠『徹選擇抄』に「菩提心願行事」として解釈する。すなわち、
「菩提心願行事
問ふ、菩提心の願無くとも浄土に生ずべきや。答ふ、和尚の御意は、設ひ菩提心の願なしと雖も、浄土に生ずべし。中下の六品は菩提心を發さざるが故なり。但し今集の意は、大乘の本意は菩提心を具足して往生すること、是れ要なり。而れども下機に望みて菩提心を廢すると云ふ。一向に菩提心を非とする事、其理無し。故に迴向發願心中、近迴向とは、三心の中、第三心に限り、遠迴向とは兼ねて菩提心に通ず由を申ぶるなり。假令無智の往生の中には成佛を期せざるものも之れ有るべし。是れは只だ三心を具して菩提心を求すべからず。今は本意を釋するなり。問ふ、三心と菩提心と同異如何ん。答ふ、不同なり。但し三心具足の人は、三乗の中、何れに可攝すべきやと云ふ尋有り。満願社、覺明房に學するの後、三心は二乗の心に當ると云云。先師、之れを聞き驚て云く、二乗心は灰斷を期する心なり。三心具足の人は、菩薩乘に攝すべし。是れ則ち別意樂の菩薩なりと（云云）。此の義の意は大乘の土を欣へば菩薩乘なる事は決定なり。而るに此の人の發す所の三心の中の利他眞實は是れ菩提心の一分なり。還相迴向も又、菩提心の一分なり。此の初心の凡夫の發す所の三心の中に菩提心に同ずる邊あるを取りて發大心と云ふべきなり。（云云）然れども唯だ自利

眞實のみ有り、唯だ往相の廻向のみ有りて、兼濟成佛の心無き者も亦た往生すべきが故に、第一の初番の釋と第三の初番の釋とは偏へに自らの往生に約す。初番の釋はアルヘキニ取りての事なりと先師常イハレシなり。又、涅槃經には未曾發心尚を菩薩と名づく云へり。但だ三心を發する者を菩薩と名づく證據、之れ分明なり。《云云》持願房、毗沙門堂に參じて問て云く、三心と菩提心と同異如何ん。法印答へて云く、菩提心は發すべきこと難し。三心は我等が發すべき心なり。彼此大に異なりと《云云》然して座より起ちて去るとき、法印大音を以て誦して云く、聖教の抑揚、一向すべからずと《云云》《淨全》七・一一七頁上五行く下十一行）とある。この中に見られる「第一の初番の釋」および「第三の初番の釋」について聖聰『徹選擇本末口伝抄』に

「第一初番釋等

私に云く、至誠心は三心の中第一なり。中に於いて自利・利他の二番有るの中、自利は初番なれば第一の初番と云ふ。又、廻向心は第三心なり。中に於て、往相・還相の二番有り。往相は初番なれば第三の初番と云ふ。《淨全》七・一二九頁上一く四行）と説明する。また、「初番釋アルヘキニ取事也等」について、同書に續いて、

「初番釋アルヘキニ取事也等

私に云く、利他眞實と還相廻向はアランモ吉きなり。無きも亦た往生すべし。自利眞實と往相廻向は定てアルヘキ心なりと云ふ意なり《云云》《淨全》七・一二九頁上五く七行）と説明がある。

(7) 四弘誓願…大乘仏教の菩薩が起すべき四つの誓願。度(すべての衆生を救おう)、断(すべての煩惱を断とう)、知(すべての教えを学ぼう)、証(この上ない悟りを得よう)の四つ。

(8) 善導『觀經疏玄義分』に「言南無者即是歸命亦是發願迴向之義」《淨全》二・十頁上十七行く下一行）と言う。

(9) 三解脱…解脱に至る、一切を空と觀じる空(梵 sunyata)・空であるゆえ一切に区別する特徴がないことを觀じる無相(梵 animitta)・

それゆえ求める心を捨てる無願(梵 apraṇhita)の三種の三昧。

(10) 六神通…神足通(どこにでも行ける能力)、天眼通(あらゆるものを見通し、未来の人々の転生をも知る力)、天耳通(あらゆる音、声を聞く能力)、他心通(他人の心を知る能力)、宿命通(自身の過去を知る能力)、漏尽通(自身の煩惱が尽き、転生のないことを知る能力)の六つの特別な能力。

(11) 煩惱境…智顗『摩訶止觀』に説く十種の觀法(十乘)の対象としてあげられる十種(十境)のうちの第二。觀の対象として煩惱を挙げるのは、対治するためなので、「対治すべき煩惱」と訳した。

(12) 廢之也…妙瑞『徹選擇集私志記』巻中に「是れ聖道門の菩提心を廢するなり。但し、上機有りて、設ひ此土に於て菩提心の願有ると雖も、菩提心の行を成就すること能はざるが故なり」《淨全》八・一七〇頁上九く十一行）と解釈されている。

(13) 羽翻(うかく)…鳥の翼。翻は羽根のもと、または羽根のくき(『新字源』八〇四頁上)。

(14) 龍樹『大智度論』「新發意菩薩。先教取相隨喜。漸得方便力。爾乃能行無相隨喜。譬如鳥子羽翼未成、不可逼令高翔。六翻成就則能遠飛。」(大正一五〇九番、『大正藏』二五・四八九頁下七く十行)。

(15) 翅…つばさ、はね。(『新字源』八〇二頁上)

(16) 龍樹『大智度論』「譬如鳥無翅不能高翔。菩薩無神通不能隨意教化衆生」(大正一五〇九番、『大正藏』二五・七七頁下二九行く七一六頁上一行)

(17) 智顗『淨土十疑論』「又如鳥子翅羽未成。祇得依樹傳枝。不能遠去。翅翻成就。方能飛空。自在無礙。凡夫無力。唯得專念阿彌陀佛。」(対象一九六一番、『大正藏』四七・七七頁下二〇く二三行)

(18) 大智律師…元照(がんじょう)、一〇四八―一一一六。南山律宗第十六祖。杭州の西湖東岸の靈芝崇福寺に三〇年間居住。著作に『觀無量壽經義疏』三卷、『阿弥陀經義疏』一卷などがある。『新纂淨土宗大辞典』二七六頁参照

- (19) 『樂邦文類』卷二「浄業禮懺儀序」(『浄全』六・九六七頁下十―十一行)。
- (20) 王日休・崇寧四年(一一〇五)―乾道九年(一一七三)正月一日。字は虚中、龍舒居士と号した。宋代の居士で浄土教者。『選択集』第十三章私釈段(『浄全』七・六四頁八―十行)に、王日休「龍舒浄土文」について言及がある。
- (21) 靈芝元照『阿弥陀経義疏』(『浄全』五・六八一頁下十五行―六八二頁上五行)。
- (22) 『大乘莊嚴功德経』・北宋・法賢訳『大乘無量寿莊嚴経』三卷。『無量寿経』の異訳。『浄全』一・一六四頁―一八三頁。
- (23) 『大乘無量寿莊嚴経』には、念仏だけでなく諸行ともに説かれている。また、この経には、その正しさを諸仏が証明する明文がある。したがって、念仏と余行とともに証誠することになる。
- (24) 『選択集』第十四章私釈段の第一の説(『浄全』七・六六頁十一―十三行)。
- (25) 「又如來滅後之時爲念佛行者」・聖聰『徹選択本末口伝鈔』には、恐らくは「又爲如來滅後之時念佛行者」を筆記者が誤ったのであろうとある(『浄全』七・一四〇頁上十三―十六行)。
- (26) 護念と証誠について、聖問『決疑鈔直牒』巻十に、「問ふ、証誠と護念と何の差別有るや。答ふ、証誠は衆生の信心を勧む、護念は衆生の退縁を護る。此れ乃ち証誠すれば即ち護念あり。故に經に所護念經と云ふ。」(『浄全』七・六二二頁下十二―十四行)とある。
- (27) 五濁・時代が下るにつれて増大する五つの穢れ。劫濁(時代の穢れ)・見濁(思想の穢れ)・煩惱濁(人心の穢れ)・衆生濁(人の質の低下)・命濁(寿命が短くなる)の五つ。
- (28) 仏眼・五眼(肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼)のひとつ。仏に具わる眼で、一切を見通し知る力があり前の四眼をすべて備える。
- (29) 選択惡業對待・良忠『徹選択抄』に、「選擇惡業待對事
- 先師云く、第三の心の下に云く、明能く闇を破し空能く有を含む等の如しと(云云)。喩を以て法に合せば、十惡と一善と待對するに一善能く十惡を滅す。破戒と一念と待對するに一念能く破戒を滅す。五逆と十念と待對するに十念能く五逆を滅す。今の釋の喩の意、此の義を顯す。(云云)普賢の願に云く、願くは我れ命終せんと欲する時に臨んで、盡く一切の諸障礙を除き、^{まのあた}面りに彼の佛阿彌陀を見たてまつりて、安樂國に往生することを得んと(文)。文殊發願經に云く、願くは我れ命終の時に盡く諸の障礙を除き、面りに阿彌陀を見たてまつり、安樂國に往生せんと(文)。(『浄全』七・一一八頁上―八行)
- (30) 曼陀羅仙訳『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』「善男子善女人よ。一行三昧に入らんと欲さば、應に空閑に處し、諸の亂意を捨て、相貌を取らず、心を一佛に繋け、専ら名字を稱すべし。」(大正二三三番、『大正藏』八・七三一頁中―三行)。
- (31) 般若三藏訳『大方廣仏華嚴經入不思議解脫境界普賢行願品』「願くは我れ命終らんと欲する時に臨んで 盡く一切の諸障礙を除き、面りに彼の佛阿彌陀を見たてまつり 即ち得往生安樂國に往生することを得ん」と(大正二九三番、『大正藏』一〇・八四八頁上九―十行)。注(28)の『徹選択抄』の解釈中に引用されている文である。
- (32) 佛陀跋陀羅訳『文殊師利發願經』「願くは我れ命終の時に 諸の障礙を除滅し 面りに阿彌陀を見たてまつり 安樂國に往生せんと」(大正二九六番、『大正藏』一〇・八七九頁下二〇―二二行)。注(28)の『徹選択抄』の解釈中に引用されている文である。
- (33) 伽梵達摩訳『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經』「亦、應に専ら我本師阿彌陀如來を念ずべし。」(大正一〇六〇番、『大正藏』二〇・一〇七頁上四―五行)。
- (34) 良忠『徹選択抄』に「勢至選擇事
- 首楞嚴經に二十五圓通を説く中に、五卷の最後に勢至圓通を説きて云く、我れ本と因地に念佛の心を以て無生忍に入る。今、此の界に於て念佛の人を攝して浄土に歸せしむ(文)と。長水疏に云く、念佛とは

稱名なり（云云）（『浄全』七・一一八頁上九～十二行）と説明する。
『首楞嚴經』とは、般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』の「我れ本と因地に念佛の心を以て無生忍に入る。今此の界に於て念佛の人を攝して浄土に歸せしむ。」（大正九四五番、『大正蔵』十九・一二八頁中三～四行）のことである。この第八の選択については、經文の引用が欠落している。

(35) 龍樹『十住毘婆沙論』易行品「佛法に無量の門有り。世間の道に難有り易有り、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂なるが如し。菩薩道も亦た是の如し。或は勤行精進なる有り。或は信の方便を以て易行にして疾く阿惟越致に至る者有り。」（大正一五二二番、『大正蔵』二六・四一頁中二～六行）

(36) 龍樹『大智度論』积往生品「阿彌陀佛先世の時、法藏比丘と作て、佛將導して遍く十方に至りて清浄の國を示して、淨妙の國を選択せしめ、以て自ら其の國を莊嚴せしが如し」（大正一五〇九番、『大正蔵』二五・三四三頁上二～四行）。ここで、龍樹は「選択」の語を用いている。

(37) 世親『往生論』「云何が讃歎する。口業をもつて讃歎したてまつる。彼の如来の名を稱するに、彼の如来の光明智相の如く、彼の名義の如く、如實に修行して相應せんと欲するが故に」（どのように讃嘆するのか。口業によつて讃嘆するのである。阿彌陀如来の名を称えて、阿彌陀如来の光明と智慧のすがたのように、ありのままに修行し、名に込められた内容にふさわしくありたいと欲するからである）（『浄全』一・一九三頁九～十行）。

(38) 廬山慧遠が、廬山般若台阿彌陀像前において、一二三人の同志を集めて念仏三昧を修した。その時の参加者の一人である劉遺民が讀んだ「立誓文」が『出三蔵記集』一五（大正二一四五番、『大正蔵』五〇・一〇九頁下十二行～一一〇頁上八行）に収録されている。この集まりが結社となり、後に白蓮社と呼ばれるようになった。

(39) 在心・在縁・在決定・曇鸞『往生論註』に、長い間生死を繰り返し

て重ねてきた多くの罪がどうしてわずか十念という軽い修行によつて滅し、不退転の位に至ることができるとかという問いに對して、「在心・在縁・在決定」の三つの観点から軽い重いは時間の長さで計られるものではないという解釈されている（三義校量）。

在心：造罪の人は自分の虚妄と誤つた見解を心の拠り所として罪を造り、十念は、善知識の勧めによつて真実の姿を説き明かす仏の教え（念仏の教え）を聞くことによつて生まれたものである。十念は真実、造罪は虚妄である。例えば、千年もの間、ずっと闇に閉ざされていた部屋に、一瞬でも光が入れば、たちまちに明るくなる。闇であつた長さには関係なく、一瞬の光で闇は消え去ることと同様、罪を重ねてきた時間の長さで十念の時間の短さは罪を減することとは無関係である。在縁：造罪の人は自分の妄想の心を拠り所にし、煩惱虚妄の心による果報である衆生を縁として罪を造り、十念は無上の信心を拠り所にし、阿彌陀如来の手だてとして立てられた真実であり清浄である無量の功德の名号を縁として生じる。例えば、毒の矢が当たつて、筋は切れ骨は破れた人でも、解毒の薬を塗つた鼓の音を聞けば、すぐに矢は抜け毒は消えるのと同様である。（『首楞嚴經』に説かれる内容）矢が深く刺さり、毒が激しいからといって、鼓の音を聞いても矢が抜け毒が消えないと云うことがあるだろうか。（薬の効き目が確かなものであれば、傷の深さによらず必ず治癒する。如来を縁とする名号の薬は、深く重い罪も治癒するという喩え）。

在決定：造罪の人は、まだ後があるという心・雑念の雑じつた心を拠り所にして罪を造り、十念は明日はもう頼むべくもないというさし迫つた心・純粹な心を拠り所として生じる。（これしかないという差し迫つた心だから）決定（必ず）の意」と名づけるのである。この三つの理由で、十念は重ねてきた罪より重く、罪の重ねてきた人も十念によつて三界から出ることができると云うことができる。

これに續けて、以下の問答がある。

【問】質問する。心がもし外のことに氣を取られて散乱すれば、心を

元に戻して念仏の数を数えなおさなければいけない。しかし、それでは数を数えなおすだけであって、ずっと続けたということ（無間）にはならない。また心を凝らして想いを注げば、念仏の数を数えることができる。どうすれば、念仏の数を数えることができるか。

【答】答える。『観無量寿経』に十念と説いているのは、往生の業が成就したことを明らかにしているものであって、必ずしも念仏の数を数えなければいけないということではない。例えば、夏の蟬は春と秋を知らないと言うことと同様である。蟬は春と秋を知らないので夏がわからない。ただ、春と秋を知っているものが夏ゼミと言っているだけである。十念によって往生の業が成就するとは、高い悟りの位に達した仏・菩薩のみが言えることである。ただ念仏を相続して他のことに心を移さなければよい。（念仏を相続するのだから）どうして念仏の数を数えることができるだろうか。もし、どうしても数を数えなければいけないのならば、手だてがないわけではない。

しかし、それは必ず口伝えによって授けて、筆で書きとめてはいけない（曇鸞『往生論註』、『浄全』一・二三六頁上七行―二三七頁上九行）。

(40) 『隋天台智者大師別伝』「讃曰。四十八願莊嚴淨土華池寶樹易往無人。火車相現能改悔者。尚復往生況戒慧熏修。」（大正二〇五〇番、『大正藏』五〇・一九六頁上二六―二八行）

(41) 『漢語灯録』卷九所収の『類聚浄土五祖伝』に、『新修往生伝』の善導伝を引いて「或る人、導に問て曰く、念佛の善、浄土に生ぜんや。對へて曰く、汝が所念の如く汝が所願を遂ぐ。對へ已て、導乃ち自ら阿彌陀佛を念ず。是の如く一聲するに則ち一道の光明有りて其の口従り出す。十聲より百聲に至るに光亦た之の如し」（『浄全』九・四二六頁上十六行―下一行）と善導の口より光明が発せられたことについての記述があるが、その相手が懐感かどうかはわからない。また、化仏について、出典未詳。

(42) 贊寧『宋高僧伝』卷二十五「少康伝」に、「遂に烏龍山に浄土の道

場を建て、壇三級を築き、人を聚めて午夜行道す。」（大正二〇六一番、『大正藏』五〇・八六七頁下七―九行）とある。

(43) 法照・生没年代および出身地・俗姓などは未詳。一説には唐・天宝五年（七四六）―開成三年（八三八）。阿彌陀仏から授かったという五会念仏を宣布した。著作に、『五台山聖竹林寺釈法照得見台山境界記』一卷、『大聖竹林寺記』（散佚）、『浄土五会念仏誦経観行儀』三卷、『浄土五会念仏略法事儀讃』がある。（『新纂浄土宗大辞典』一三六四―一三六五頁参照）

(44) 『大聖竹林寺記』…現存しない。『拾遺和語灯録』卷中所収の『登山状』に引用がある。次注参照。

(45) 『拾遺和語灯録』卷中「登山状」

「又五臺山の聖竹林寺の記にいはく。法照禪師清凉山にのぼりて。大聖竹林寺にいたる。ここに二人の童子あり。一人を善財といひ。一人を難陀といふ。この二人の童子。法照禪師をみちびきて。寺のうちにいれて。漸漸に講堂にいたりてみれば。普賢菩薩。無數の眷屬に圍繞せられて座し給へり。文殊師利は。一萬の菩薩に圍繞せられて坐し給へり。法照禮してとひたてまつりていはく。末法の凡夫はいづれの法をか修すへき。文殊師利こたへての給はく。なんぢすでに念佛せよ。いまましくこの時也と。法照又とひていはく。まさにいづれの佛をか念すへきと。文殊又の給はく。この世界をすぎて西方に阿彌陀佛まします。かのほとけまさに願ふかまします。なんぢまさに念ずへしと。大聖文殊。法照禪師にまのあたりの給ひし事也。」（『浄全』九・六一六頁上七行―下二二行）。また、『漢語灯録』卷三「念仏大意」（『浄全』九・三六七頁上二―十七行）に同様の記述がある。

(46) 慧日・慈愍三藏・唐・永隆元年（六八〇）―天宝七年（七四八）。慈愍三藏は賜号であり、本名は慧日。義浄に影響を受けて、嗣聖一九年（七〇二）に海路で渡印。仏蹟を巡拝し、ガンダーラで観音の靈告を受けて浄土往生の志を強くし帰唐後念仏を弘める。慈愍三藏の号は玄宗皇帝より与えられたもの。著作に『略諸経論念仏法門往生浄土

集』三巻がある。賛寧『宋高僧伝』巻二七（大正二〇六一番・『大正藏』五〇・八九〇頁中一行（下十五行）参照。

- (47) 『樂邦文類』巻二所収「浄業礼懺儀序」（『浄全』六・九六六頁上十二行（九六八頁上七行）に、元照が念仏の教えに至る経緯が述べられている。

- (48) 上乘（最上の乗り物の意）大乘のこと（石田瑞麿『例文仏教語大辞典』五七〇頁中（下））。ここでは、天台に続くので、一仏乗とした。

- (49) 源信『往生要集』巻上に「但し顯密教法は其の文、一に非ず。事理の業因、其の行、惟れ多し。利智精進の人、未だ難とせず。予の如き頑魯の者、豈に敢てせんや。是の故に、念佛の一門に依りて聊か經論の要文を集む」（『浄全』十五・三七頁上六（八行）、『大正藏』八四・三三頁上七（九行）とある。

- (50) この法然の言葉は、父親の死が出家の動機とする伝記の記述と整合しないように思われる。

- (51) 源信『往生要集』（『浄全』十五・一〇八頁上五行）

- (52) 源信『妙行業記』…未詳。妙瑞『徹選撰集私志記』には「世に流行せず。故に義山公も此の記を見ずと云へり。〈大經私記三十丁（『無量寿經釈（『和語灯録』所収）』…『浄全』九・六〇七頁上十五行）・要集記五ノ十九丁（良忠『往生要集義記』…『浄全』十五・二七七頁上十四行）・翼賛六ノ五六丁（義山『円光大師行状画図翼賛』…『浄全』十六・一六五頁上十二行・同下八行）云云」（『浄全』八・一八九頁下六（八行）とある。

- (53) 覺超僧都…？―長元七年（一〇三四）。台密十三流のうち横川流の祖であり、兜率僧都とも呼ばれる。天台教学を源信に学び、秘密灌頂を慶円より受け、兜率院に住し、晩年には横川首楞嚴院に隱棲した。二十五三昧会の發起人の一人として連署し、源信没後には過去帳を記すなど、中心的な役割を果たしていたとも言われる。（『新纂浄土宗大辞典』二二二―二二三頁参照）

- (54) 俱胝…梵語 koṭi の音写。十の七乗、すなわち一千万。諸説あり、

十万・百万・億ともいう。一俱胝を一千万とすると二十俱胝返は二億返となる。

- (55) 長日…妙瑞『徹念仏集私志記』巻中に「此れ平生の謂ひなり。乃ち常日・長時・平生と云ふは皆是れ同意なり」（『浄全』八・一九〇頁上九（十行）とある。

- (56) 博陸…関白のこと。

- (57) 槐門…三公（左大臣・右大臣・太政大臣）のこと。

- (58) 炳誠…明らかにいましめること。

- (59) 伏して、仰ぎて…『孟子』尽心上「仰不愧於天、俯不忤於人」（仰ぎて天に愧じず、俯して地に忤じず）。

- (60) 窮老…『徹選撰本願念仏集』下の末尾に、「于時嘉禎三年歲次丁酉六月二十五日安居念佛中、八旬窮老謹記之畢」（『浄全』七・一一一頁下四（五行）とある。「窮老」は、年老いて生活に困窮している上に、体力や氣力が衰えていること、またはその人の意。

- (61) 優婆提舍…梵語 upadeśa の音写。論議等と訳される。教理の解説、論議。經典の注釈書の標題としても用いられる。

- (62) 「不可得而称」…『論語』公治長「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也。」（子貢曰く、夫子の文章は、得て聞きくべきなり。夫子の性と天道とを言ふは、得て聞くべからざるなり）。「不可得而称」は「不可得称」と同じことを表す。

- (63) 乗急…仏の教え（乗）によって智慧を磨くことに専心努力すること（石田瑞麿『仏教語大辞典』五五四頁下）

- (64) 善導『観念法門』に「專念彌陀佛名一萬二萬三萬五萬乃至十萬」（『浄全』四・二二七頁下九（十三行）とあること）を指す。

- (65) 善導『観念法門』（『浄全』四・二二四頁上四行）

- (66) 今案…自分で新しく立てた考え。（『広辞苑』第七版）

- (67) 異義蘭菊…聖岡『決答疑問銘心鈔』に「異義蘭菊等とは是れ茂き義なり。彼の藁蘭茂らんと欲すれども、秋風之を破ると言ふが如き等なり。」（『浄全』一〇・六二頁上十六（十七行）と云う。ここにある

引用は、唐太宗撰『帝範』去讒「叢蘭、茂らんと欲し秋風之を敗る」
(蘭が繁茂しようとするが、冷たい秋風が枯らしてしまふ)である。

(68) 紛紛…入りまじつてみだれるさま。(『広辞苑』第七版)

(69) 乱入…乱暴に押し入ること。無法に押し入ること(『広辞苑』第七版)

(70) 浅猿し(あさまし)…なさけない。みじめである。見苦しい。(『広辞苑』第七版)

(71) 第六天…欲界六天の最高第六の他化自在天のこと。ここに生まれたものは、他の作り出した樂事を受けて自在に自分の樂とするという。また、魔王の住所とされる。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』七三五頁上)

(72) 真文(しんもん)…真実の經文。仏・菩薩の説いた文句。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』六三六頁上)

(73) 誑惑(おうわく)…うそをいつてたぶらかすこと。だまし、まどわすこと。(石田瑞麿『例文仏教語大辞典』一〇三頁中)

(74) 椎撲地獄…『浄全』七・九七頁冠注に、「椎撲地獄の説、善恭敬經に出づ。椎は現流本は槌に作る」とある。

『善恭敬經』については、「阿難。若有比丘於其師邊不恭敬者。我說別有一小地獄名爲椎撲。」(大正一四九五番、『大正藏』二四・一一〇二頁上十二〜十三行)とある。良忠『徹選釈抄』には「椎撲地獄事智度論に出づ。師の正義を捨て邪義を存せば此の地獄に入る」(『浄全』七・一一八頁下二〜三行)とある。ここである『大智度論』の出典については未詳・

(75) 『選釈集』に重ねて、この『徹選釈集』を造った第二の理由「乱れた末世の小賢しい智慧を誇る愚鈍な者の迷いを救うため」は、つまり、末法の迷者を哀れむからであるというのであろう。